

湯沢市中心商店街における空洞化とその要因

菊池 弦太

キーワード：秋田県湯沢市 中心商店街 後継者問題 借地経営 廃業意識

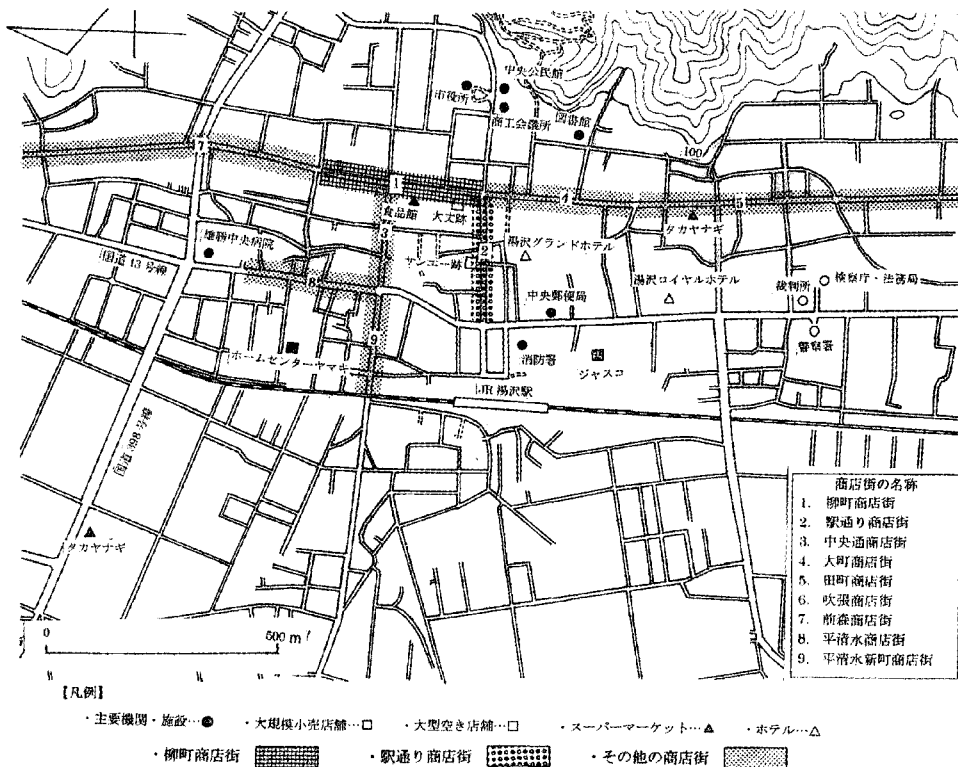
I はじめに

現在、日本では1人あたりの自動車保有率の増加によって急速なモータリゼーション社会が進展している。それに呼応し、全国ではロードサイドショップや大規模駐車場を完備した大型店舗の郊外立地が進み、これにより全国の各都市では都心部の空洞化が起きている（山下，2003）。秋田県湯沢市でもその傾向は顕著であり、空洞化が進展することで駅前に位置する中心商店街は衰退の一途を辿っている（第1図）。本研究では中心商業地における空洞化が著しい湯沢市の駅前の柳町商店街、駅通り商店街の2つを対象とし、土地利用調査、聞き取り調査を行い、その現状と要因を明らかにすることとする。

II 中心商店街の変化

1. 柳町商店街

柳町商店街は旧羽州街道に沿って誕生・発展してきた歴史ある商店街である。明治期に宿場町として栄えていたのが起源とされ、その後徐々に商業が集積するようになって現在の形態になった。柳町商店街は衣料品小売業を営む店が多くみられる（第2図）。次に多かったのが最寄品小売業で、おもに金物や食器、さらには医薬品、化粧品を扱う店が多い傾向にあった。逆に眼鏡や靴、鞆といった買回品小売業が少なく、最も少ないのは食料品小売業であった。加えて通りには空き店舗が多く存在している。空き店舗数は16店舗である。その中には大規模な売場面積



第1図 研究対象地域の概観（2003年）

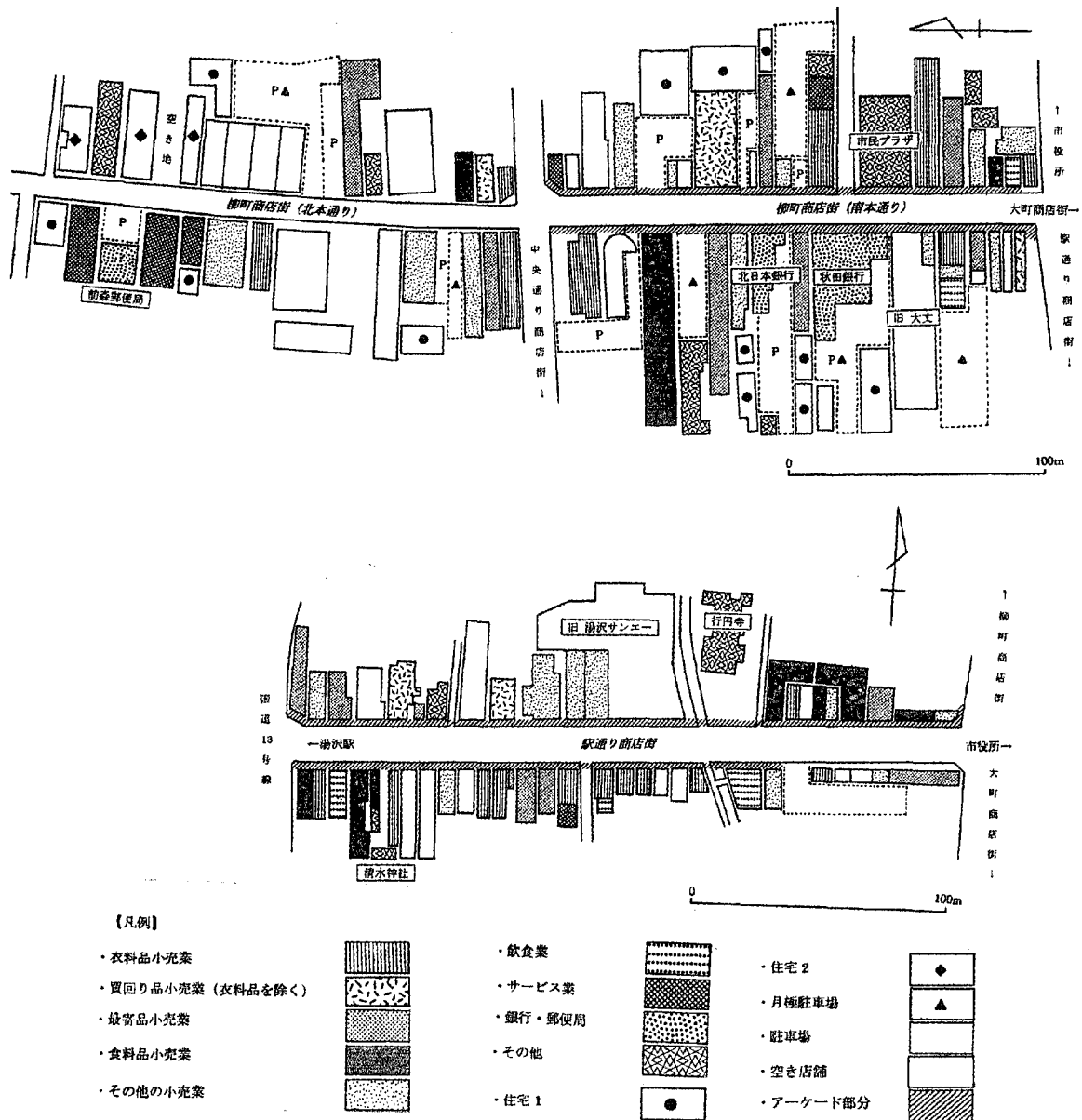
（都市地図秋田県湯沢市〈2001〉と現地調査により作成）

を持つショッピングセンター（大文）も含まれ、営業している店舗以上にその姿は目立ったものになっている。

2. 駅通り商店街

駅通り商店街の歴史は、旧街道沿いに位置している柳町商店街と比べてまだ浅い。100年程前に一帯は稲作を中心とした農家や、それらが所有する水田が広がっていた。商店街として発展していく契機となったのは1905年（明治38）の奥羽線開通による湯

沢駅の建設である。現在、通りでは衣料品店を営む店がとくに多く、食料品や金物、荒物などを扱う最寄品店は多く存在するものの、衣料品を除いた家具や靴などの買回商品を置く店がほとんど無い状態にあった。また飲食店を営む店が少なく、通りで3件のみとなっている。柳町同様に空き店舗は多く、11店舗あった。通り中央部に位置する大型の空き店舗（湯沢サンエー）が非常に目立ったものとなり、来街者に対して景観的な悪印象を与えている。



第2図 研究対象商店街の土地利用（2003年）

（2003年3月から9月の土地利用調査により作成）

